

紅、花
(五) 本島上陸

琉 紅

(五) 本島上陸

海蛇事件から三日が過ぎた。

本島のちようど中央に位置する牧港に、北山の大型船が停泊している。賢龍を中心に武士等に続いて、美久が船の架け橋を下りていく。

賢龍は待ち受けて、

「ここが、お前が行きたがっていた本島だ」

と、包帯をしたままの右足を、しびれが残っているかのようになぞりながら歩いてきた。彼に続いて美久も港へと足を踏み入れた。

その瞬間、美久はその場に立ち尽くした。

すぐに足に震えを覚え、動かなくなった。

地面に捕まえられるかのようだ。

(すごい、大地の力が体に伝わってくる……でも、人々は混乱している。愛情と憎悪の区別さえ付かない)

賢龍は美久を浦添にあるヌル養成所に入れるために、久高島から連れてきたのだった。自分の右足、命を救ってくれた彼女に対しての礼だった。さらに彼女の才能にも心惹かれていた。

浦添の城下町にある養成所の宿舎の前で、彼は美久に話し

かけた。

「ここは、島じゅうから君の様な才能ある若者を集めて、勉強をさせている。ここで神事、祭事の事をさらに深く学ぶといい」

「ええ、楽しみです。賢龍様がお勤めされているのは、この近くのですか」

「そうだな、すこし遠い。しかし琉球には、まだここにしかないの、仕方ないのだ。学んだ後、私のもとで働いて欲しいのだが」

「約束します。ご配慮に感謝します」

彼女は本島に初めて足を踏み入れたのもそうだが、姉と会えることが、嬉しくなっていた。美久の姉は、出稼ぎで那覇に居るはずだった。

この養成所は、中山王が開設し、表向きは祭司育成が名目だが、武術で有名な先生等が名を連ねている。また必死に全島から有能な学生を集めている事に、何か別の趣旨が隠されていると、誰も気付いていなかった。